

沼津市

# 明治史料館通信

2007.4.25 (季刊 年4回発行) Vol. 23 No. 1 通巻第89号



松平信敏  
(折井昭思郎氏提供)



折井正和  
(折井昭思郎氏提供)

シリーズ  
沼津兵学校とその人材

裁判官になった折井正和

80

沼津兵学校の出身者で後に裁判官になった人物としては、蘭鑑(三等教授方、杉浦赤城(三等教授並)、伊藤隼(調馬方)、村田継述(第九期資業生)、西川鐵次郎(附属小学校生徒)らが挙げられる。ここで紹介する折井正和もそのような履歴を持つ一人である。

折井正和は、旧名を長三郎といひ、明治三年(一八七〇)三月に及第した沼津兵学校第五期資業生である。それ以前に刊行された『沼津御役人附』には、員外生の欄に大門顕重(辰次郎)・細井均安(広川久)・中島静(文次郎)とともに名前が掲載されているので、当初は士官志望ではなかったものと思われる。しかし、結局四人とも第五期資業生となつたいきさつは不明である。なお、間に合わなかったであろう、三年三月刊の『静岡御役人附』の資業生欄には掲載されていない。

そもそも折井家は甲斐国を發祥

の地とし、戦国時代には武田信玄・勝頼に任せ、同家滅亡後に徳川家に属したという由緒をもつ旗本である。上総国望陀郡の二か村に一五〇石の領地を有した。次重―次正―門次―正次―正隆―興正―朋正―正聲―伸正―富正と続き、正和に至った。ただし、正和は養子として一代目を継いだ人である。実父は青木藤次郎（露心）といっ

たらしい。正和は、静岡移住予定者名簿「駿河表召連候家来姓名」には、小筒組差図役頭取として記載されており、陸軍局の一員として沼津に移住したことがわかる。なお、養祖父にあたる折井伸正は明治元年に亡くなり、知行所である上総国望陀郡田川村（木更津市）の妙光院に葬られているので、一家そろっての移住ではなかったようだ。沼津から上京した後は、陸軍省に文官として勤務したらしい。以下のような公文書が残る。

### 十三等出仕

#### 軍医部分課

#### 折井正和

右者当七月九日御用候二付三

重県庁へ出頭候様御達二付、同月廿三日出立致候二付、御届仕置候処、其後同県江御採用二相成候哉、未夕御達無之候間、此段相伺候也

十月三日 石川軍医監

陸軍省十三等出仕から司法省十

四等出仕に転じ、一〇年（一八七七）横浜裁判所十六等出仕となる。一二年（一八七九）内務省七等属に転じ、判事補を兼ね小笠原島に赴任した。その後、長崎裁判所判事補となり、一五年（一八八二）には佐賀治安裁判所判事補長に就任した。掲載した法服姿の写真は、松江始審裁判所判事の時代に撮影されたものである。

明治四四年（一九一）八月二日、七二歳にて没。正六位勲五等、戒名は翠涯院殿中道正和大居士、東京都文京区の菩提寺に眠る。正和夫人鶴子の兄中山要人（天保一四年生まれ、明治四〇年六月

二八日没）は、二〇〇石の旗本で、維新後はやはり判事・弁護士となり、沼津治安裁判所に勤務したこともあった。

正和の義兄にあたる松平信敏（勘太郎・大隅守、天保四年一月生まれ、明治三六年四月七日没）は、二二〇〇石の旗本で、大坂町奉行・勘定奉行・大目付などを歴任、静岡藩でも少参事・藩庁掛、廃藩後は静岡県典事・大蔵省八等出仕をつとめた人物である。

正和の息子九思郎（明治八年生まれ、昭和一〇年没）は、鉄道省

## 江原素六とその周辺<44>

### 江原素六の伯父

### 大沢善吉

江原素六は、家計が苦しかったため、嘉永二年（一八四九）、八歳の時、伯父大沢善吉の学資援助によりどうにか寺子屋に入門することができた。善吉は幼い素六を連れ師匠のもとに出向き、一切の手続きをしてくれたという。そして、安政三年（一八五六）、素六が一五歳で元服する際には、善吉が烏帽子親をつとめた。

に奉職、沼津駅助役を勤めていた時期もあった。正和が長州征伐の際に將軍家茂から拝領した陣羽織などが伝来したが、残念ながら沼津の大火で焼失したという。

〈参考文献〉

折井家過去帳（折井昭思郎氏所蔵）、『新訂寛政重修諸家譜』第三、筑紫敏夫「旗本たちの幕末維新―上総国望陀郡を中心に―」、『袖ヶ浦市史研究』第一一号、大植四郎『明治過去帳』、『常寂山智観寺誌』（一九九六年）

（樋口雄彦）

善吉は、素六の父江原源吾の次兄であり、旗本小野家に生まれた人だった。幼名は善次郎といったらしい（小野義光氏所蔵・天保一〇年「覚（小野鼎之助親類書）」）。兄弟の姉「のき子」が一橋家に女中奉公して金を貯め、三〇〇両の持参金を持たせ弟を大沢家の養子としたのである。

『江原素六先生伝』によれば、

この大沢家は三〇〇石の旗本だったという。しかし、同家については、これまでその家系や履歴について吟味されることがなかった。

ちょうど江原素六が元服した安政三年頃の幕臣の住所録に、「一居屋敷 牛込御納戸町 百六拾四坪余 大沢善吉」とある(『内閣文庫所蔵史籍叢刊 諸向地面取調書(三)』、一九八二年、汲古書院)。仙石右近支配の小普請であった。

江戸城の多聞櫓に残された幕臣の履歴明細短冊の中には、善吉の養子広吉のものがある。広吉は、元治元年(一八六四)一月二六日善吉の跡を継ぎ小普請入りし、慶応元年(一八六五)時点で二十歳代、高三〇〇俵を給され深川大和町に住んでいた。この短冊からは、当時善吉がすでに死亡していたこと、生前はずっと無役の小普請だったこともわかる(『江戸幕臣人名事典』第一巻、一九八九年、新人物往来社)。

元治元年一月二六日の幕府の人事記録にも、曲淵安芸守支配「善吉郎」の養子大沢広吉が家督相続

を許されたとあり(『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第十二巻、一九九三年、三一書房)、短冊の記述が裏付けられる。

大沢善吉が元治元年に亡くなったことは間違いないだろう。村田勤著『江原素六先生伝』(一九三五年、三省堂)には、「先生は大沢を徳としてその恩義を忘れず、浜松地方へ出向かれたときは、同県下引佐郡伊谷村にある善吉の墓に詣で、その後継者の家族を訪ひ、謝意を表されることを常とした」という記述があるが、維新前に死んだ善吉の墓が遠州にあるというのは不思議だ。大沢家は静岡藩士となり遠州に移住した可能性もあるが、現在のところ確認できない。

むしろ、引佐郡井伊谷村(現浜松市)に縁があるのは、素六にあってはもう一人の伯父小野貫一(正忠・鼎之助、一八七七年没)のほうである。貫一の子小野鼎(東一郎、一八四四〜一九〇四)は、浜松二等勤番組に属し井伊谷に移住、長らく同地で開墾に従事したのである。小野家の墓石は現在も同地に残る(小野家については小野義

光氏の調査による)。村田著『江原伝』の記述は、大沢家と小野家とを取り違えた可能性がある。また、江原自身が口述した回想録『急がば廻れ』(一九一八年、東亜堂書房)では、「私の伯父に当る小野鼎之助と云ふ者が机を下男に担がせ、紙に筆墨などを揃へて、その頃寺小屋へ納むる束脩二百文までも揃へてくれたとあり、就学の援助をしてくれたのは同じ伯父でも、小野のほうになつてゐる。小野家は本高六〇俵で、大沢家より禄高が低いのであるが。

ところで、大沢家の家系に関して不明点がある。先述の大沢広吉の履歴短冊には、養祖父として「大沢栗太郎」(故人)の名が記されているが、同じ慶応元年の短冊には大沢栗太郎本人のものがあり、それによれば栗太郎は二〇歳、高三〇〇俵で、文久二年(一八六二)に家督を継いだとあるのである。

当然、二人の栗太郎は別人であるが、若い栗太郎の祖父は権六、父は八之丞という名であり、両者がどのようなつながりになるのかよくわからないのだ。

やはり先述の安政期の史料には、「一居屋敷 巢鴨御駕籠町 三百坪 大沢八之丞」(『内閣文庫所蔵史籍叢刊 諸向地面取調書(二)』)とあり、善吉と八之丞の家が別だったことがわかるものの、両家の関係は不明である。たぶん本家と分家になるのであろう。

そもそも大沢家は、明治維新のドサクサにまぎれ、領地が一万石未満だったにもかかわらず遠江国で堀江藩をでっち上げたことで知られる、幕府の儀式典礼をつかさどった高家・旗本(三五〇〇石、右京大夫を襲名)を本家とする。

善吉の家は、二六〇〇石を食んだ分家の、そのまた分家で三〇〇俵を給された家(帯刀・八之丞などを通称とする)の、さらなる分家ではないかと推測する。善吉の養子広吉の実家は、高家大沢右京大夫家であり、遠い一族の中から養子を迎えたことがわかる。

大沢家の菩提寺・天眼寺(東京都台東区)には、残念ながら善吉に関して、墓石も過去帳の記載も残されていない。

(樋口雄彦)

## お知らせ欄

## ◎平成18年度受贈資料

(受贈順)

中村六三郎関係資料(中村智善様)、福田重固・高島茂徳関係資料(福田達様)、佐々木次郎三郎関係資料(佐々木貞様)、ゲートル(井口森男様)、大正・昭和戦前期雑誌など(小俣佳昭様)

## ◎平成18年度受託資料

(受託順)

羽山蝶関係文書(羽山賢次郎様)、我入道区有文書(我入道連合自治会様)、荒川重平関係文書(荒川鐵太郎様)

## ◎平成18年度館蔵等資料の提供(順不同・敬称略)

株式会社新人物往来社・『歴史読本 二〇〇六年五月号 幕末京都 志士日誌』伊庭八郎(錦絵)・競勢酔虎伝)、佐野和宏・ホームペー  
「野ぶどう」・沼津平作茶屋の桜花、  
中日本高速道路株式会社・「道の明日へ」・江原素六旧宅写真、横浜開港資料館・『F・ベアト写真集2』

外国人カメラマンが撮った幕末日本」・大築尚志ガラス板写真(大築尚志関係文書)、株式会社講談社・『トリビアの泉へえの本』第十五巻・渡瀬庄三郎写真(大野寛孝氏提供)、株式会社学習研究社・『決定版 図説幕末・戊辰・西南戦争』・江原素六写真(江原素六関係文書)、静岡県立沼津西高等学校・公式ホームページ・『江原素六生誕一五〇年記念誌』より、社団法人日本戦災遺族会・「戦争と平和展」・写真「焦土と化した沼津市街」(大野寛孝氏寄託)、静岡県文化財団・展示会「銃後にも戦争があった」・戦時中の写真8点、静霊奉賛会沼津支部・展示会・戦時中の写真25点、沼津西武・「昭和四〇年代パネル展」・「東名高速道路開通」・「蛇松線廃止」パネル、沼津市歴史民俗資料館・三市博物館共同企画展「米・コメ・こめく米に囲まれた暮らし」・浮世絵「東海道五拾三次之内 沼津(黄昏図)」等9点、大平地区連合自治会・通学合宿時展示・戦時中の写真パネル25点、日本テレビ放送網株式会社・おもいっきりテレビ」・絵葉書「(三津)

内浦長浜海岸の富士(其三)」、浮島連合自治会・浮島校区文化祭展示・写真パネル12点、沼津市立第二中学校PTA・PTA広報紙・絵葉書「沼津名勝」等3点、静岡古城研究会・シンポジウム「よみがえる戦国の村―阿野庄と七栗田―」資料・「駿河地方図」(中石田秋元家文書)、愛媛県美術館・企画展「魚のすがた展」・川村清雄画「イカ図」(江原素六関係文書)、函南町教育委員会・パネル展示「親子で考える平和」・戦時中の写真28点、エスピーエスメディアサービ  
株式会社・ビジネスベガ別冊「Megumi」富士山の恵みを巡る旅」・浮世絵「東海道五十三次 沼津(人物東海道)」、静岡県文化政策室・朝鮮通信使400周年記念事業・「青丘傾蓋集」(本町間宮家文書)、青木昇・『幕府医師団と奥医師「青木春岱」・青木春岱履歴文(乙骨太郎乙関係文書)、国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所・『富士山周辺の地震と土砂災害』フィルム「小林村変地之図」  
「田地変ジテ湖水トナル」(原資料  
山崎英彦氏所蔵)、青山学院大学文

学部史学科・マイクロフィルム複製・獅子浜植松家文書、板橋区立郷土資料館・特別展「江戸の砲術―砲術書から見たその歴史―」・「ミニエー銃弾」「胴乱」沼津御役人附」等、三島市郷土資料館・「三島と女性」・大正期女性雑誌3点、沼津信用金庫・第四回代蔵館まつり展示「渡瀬寅次郎展」・渡瀬寅次郎関係資料

## ◎館職員の人事異動について

3月31日付で館長阿部直樹が退職、4月1日付で館長端山茂樹(前沼津市歴史民俗資料館長)が着任、主幹石川治夫が文化財センターに異動、後任に主事大橋貴之(前都市計画部市街地整備課)が着任しました。

今後とも、当館の博物館活動への、変わらぬご理解とご協力をよろしく願ひ申し上げます。

## 沼津市明治史料館通信 第89号

編集 沼津市明治史料館  
発行

〒410-0051 沼津市西熊堂三七二一  
電話 〇五五-九二二三-三三三五

FAX 〇五五-九二二三-〇一八  
http://www.city.numazu.shizuoka.jp/sisetu/muji/index.htm